

現代中国語の知覚動詞に見るアスペクト無標形式の表現機能

前田 恭規

要旨

本稿は已然（完了）の事態を含意しながらアスペクト辞を持たないアスペクト無標形式に関して、その成立の動機、及び意味機能を解明するものである。アスペクト無標形式と“了”を伴う形式とは異なる文脈で用いられる傾向がある。前者は独立した文としての自立性が低く、多くは目的語を新たな事物、あるいは出来事として談話や文脈の中に導入し、その直後に続く文脈でそれに関する話題が展開される際に用いられる。それに対し後者は文としての自立性が高く、人称代名詞や定名詞句を目的語にとり、個別の対象に対する独立した動作行為に焦点が当てられる。本稿では両者の差を文中でプロファイルされるものの違いにあると考える。“了”を伴う形式では文中の動作行為が、無標形式では目的語である名詞句がプロファイルされるのである。さらに、後者における動作行為は背景化していると分析する。またアスペクト無標形式のそうした表現機能は「存現文」に代表される「存在表現」に近く、その関連性からの分析を試みる。

キーワード：アスペクト無標形式、新規事物の導入、背景化、存在表現

1. 問題の所在

現代中国語のアスペクトを表す形式の一つに動詞接尾辞“了”がある。

(1) “ [……] 动词后缀“了”的作用在于表示动作的完成” (朱德熙 1982: 68)

[……] 動詞接辞尾“了”の機能は動作の完了を表すことにある]

(2) 一般に〈完了〉を表すアスペクト形式とされる動詞接辞の“了”、すなわち LEvs は、[……] 動詞に後接して、〈限界性 (bounded) のある動作〉が参照時において〈既に実現済み〉であることを表す。(木村 2012: 149)

この“了”の文法的意味に関してはこれまでに様々な見解が提出されているが、“了”がアスペクト上の対立を明示するという点は共通する認識であると言えよう。

(3) a. 看了一遍 [一度通して読んだ]

b. 看一遍 [一度通して読む]

(3a) は「すでに読み終わった」という事態を表すが、(3b) はそれを意味しない。“了”によって、その動作行為が実現済みであるかどうかを表し分けられているのである。

しかしその一方で、こうした対立が消失する現象も指摘されている。

(4) a. 他看见一个人。[彼は (ある) 一人の人を見かけた。]

b. 他看见了一个人。

(郭锐 1997: 162)

中国語では、“了”などのアスペクト辞を伴う「已然」事態の否定には通常、否定詞“没(有)”を用いるが、(4a,b)の否定には、いずれも“没(有)”が用いられる。つまり、両者とも動作行為はすでに実現済みということである。実際、中国語母語話者も両形式の間には意味の差が感じられないという。なぜ(3)では明確であった対立が(4)では消失するのであろうか。

郭锐 1997 は、こうしたアスペクト辞を伴わず動作行為の「完了」などを表す文に関して、いくつかの例を挙げ、動詞が到達動詞、達成動詞である等、その特徴を説明している。しかし、その原因に関しては“过程成分是否带标记与多种因素有关 [過程を表す要素が標識を持つかどうかは多くの原因と関係する]”と述べるにとどまる。

これまで“了”に対する研究は数多くなされているが、当然のことながらその考察の中心は“了”の文法的意味である。(4a)のようなアスペクト無標形式(以下「無標形式」と表記する)は、“了”を伴う形式と互換可能であることから、単純に“了”が省略されたものとして扱われ、その省略される条件が示されるのみである。

本稿ではこのような、“了”を伴わずに「完了」を含意する、無標形式の完了事態表現に対して、それが果たして“了”の省略されたものと言えるのか、“了”の省略されたものでないとするならば、どのような意味を持ち、なぜ完了事態表現となり得ているのか、という点を解明する。

2. 考察の対象

無標形式が「完了」を含意することに関して、比較的早期に言及したものに、荒川 1981、李兴亚 1989 がある。いずれも、過去を表す語がある場合、結果補語がある場合、文を目的語にとる場合等、いくつかの条件を挙げ、その条件が揃うことで無標形式が成立すると指摘しているが、その成立の動機、及び意味機能の差異に関しては言及していない。それに対し、吴福祥 2005 は類型論的な観点から、中国語の“了”及び“着”について考察し、“了”の機能を「限界性」の付与とした上で、上に挙げられたような条件下で“了”が省略される理由を、“了”以外の要素がその機能を果たしているためであるとする。例えば、上掲の(4a)は“看见”という「限界性」を備えた動詞結果補語構造を述語に持ち、目的語に量的な「限界性」を示す数量表現が付けられているため完了表現になるということである。

このような説明の背景には、“了”の持つ特徴がある。“了”は「完了」のアスペクト標識であるとはいえ、どのような述語に対しても「完了」を表すことができるものではなく、(2)に示されるように、「限界性」のある動作行為に付加されるものである。動詞

自体に「限界性」がない場合、結果補語や数量表現などを用いてその動作行為に「限界性」を持たせることで、つまり他の要素の助けを借りることで、“了”の付いた完了表現を成立させることができる。荒川 1981、李兴亚 1989 等に指摘される種々の要素というのは、“了”を用いた完了表現自体の成立条件にも、読み替えられるものである。このような他の要素と共に「完了」を表すという特徴、及び中国語が文法形式としてのテンスを持たず、テンスを語彙的に解釈し得るということが、“了”以外の要素によっても完了表現が成立し“了”が省略されるという主張を支えている。

確かに、“了”を伴う有標形式と無標形式の完了事態を比べると、その成立に課される条件は、無標形式の方が厳しい。このことから、“了”を使用していない分、完了事態として解釈されるため、より多くの条件が課されているのだと考えることはできる。しかし、それだけでアスペクト有標形式と無標形式との差を考えてよいのか、そのような疑問を抱かせる例が存在する。例えば、先ほどの (4a) の目的語を固有名詞にすると無標形式は、言い切りの表現としては不自然になってしまう。

(5) [?]他看见小王。[彼は王くんを見かけた。]

固有名詞は数量表現の付かない裸の普通名詞に比べ、個別性の高い名詞であると言える。“了”の文終止に関して考察した原 1994 は、このような個別性の高い固有名詞を目的語にとる文は、裸の普通名詞を目的語にとる文よりも、“了”を伴った文終止が容易であると分析している。

(6) 小宝把发现白色东西的事告诉了张老师。 (原 1994: 94)

[小宝は白い物を見つけた事を張先生に知らせた]

このような通常“了”がより許容されやすい固有名詞の場合に“了”を落とすことができないのはなぜなのか。“了”以外の要素が「限界性」を付与していれば無標形式が許容されるという記述では (5) の不成立を説明することができない。

また荒川 1981 などにも指摘されているが、目的語に文をとる場合（いわゆる「節 (clause)」が動詞の目的語に相当する場合）にはそもそも“了”を用いることが困難である。もし無標形式の完了事態表現が単純に“了”の省略されたものであると考えると、こうした事実もまた説明が難しい。

本稿では無標形式の完了事態表現に対し、“了”の要求する「限界性」とは異なる立場から論じる。

その際に手掛かりとなるのは、郭锐 1997 が挙げる (4)、及び次の (7) の例である。

(7) a. 我看见屋里没有人。[私は部屋の中に人がいないのが見えた。]

b. 他发现有关情况。[彼は異常があるのに気付いた。]

郭氏が指摘する無標形式にはいくつかの共通点が見られるが、その一つに述語形式が“看见 [見る-見える]”“发现 [発見する]”という、人間の知覚を表現するものであるという点がある。このような知覚を表す際に、無標形式の完了事態表現が成立している

というのは興味深い事実である。本稿では、これらの知覚を表現する述語形式を手掛かりに、無標形式を調査し、それがどのような状況下で成立しているのか分析を行う。

3. 無標形式の使用状況

3.1 無標形式の表現機能

本節では知覚の表現として“看见 [見る-見える]”“看到 [見る-達する]”“听见 [聞く-聞こえる]”“听到 [聞く-達する]”“发现 [発見する]”を取り上げ、小説中に現れる例から、無標形式の表現機能を考察する。これらの述語では有標形式、無標形式で用例に偏りが見られる。

表 (1) 王朔の小説 25 作品における“看见”の用例分布

	目的語別用例数 (その内文終止する用例数)					
	文	固有名詞	人称代名詞	指示詞+名詞	数量詞+名詞	普通名詞
-了 116 例	84 例 (22 例)	4 例 (1 例)	5 例 (1 例)	4 例 (0 例)	14 例 (3 例)	5 例 (1 例)
+了 18 例	0 例	1 例 (1 例)	10 例 (4 例)	4 例 (4 例)	0 例 (0 例)	3 例 (1 例)

まずは、(4a) のような、知覚動詞を主要動詞とし、名詞句を目的語にとり、単独で終止する文³を見ていく。表 (1) の“看见”を見ても分かるが、有標形式に比べ無標形式では文終止する例が少なく、文の自立性が異なるということが分かる。こうした例がどのようなかたちで自立した文として成立しているのか、以下、小説⁴に見られる例を挙げる。まずは“看见”の例である。

- (8) 汽车在一个部队招待所的楼前停下，一千人下了车，在何必的引导下进了楼。刚上二楼楼梯，迎面就看见一幅大招牌：“六一”晚会筹备组《大众生活》杂志社主办。一个粗大、醒目的红箭头直指里边的一排房间。 (王朔：懵然无知)
 [車は一つの部隊招待所の前で止まり、一同は車を降り、何必の案内のもと、建物に入った。二階の階段を上がると、真正面に一つの大きな看板が見えた。：「六一」晚会準備組『大衆生活』雜誌社主催。太くて目立つ赤い矢印が中の並んだ部屋を指していた。]

(8) は章の始めの一段である。下線部を見ると、目的語に数量詞の付いた名詞句“一幅大招牌 [一つの大きな看板]”が用いられていることが分かる。中国語における“一个 [一つの] +N”という表現が、不定の名詞を表すということは早くから指摘されているが、ここでの「大きな看板」も不定の事物を表している。ここで注目すべきは、下線部に続く文であろう。波線部で示した部分は、目的語である「大きな看板」に関する描写となっている。(8) の前には“一千人 [一同]”が車に乗って“招待所 [招待所]”へと移動していく様が描かれており、全体を見ると、「一同」が目的地である「招待所」に着

いた後に、ある「大きな看板」が目に入り、続く文で「一同」の行動ではなく、その「大きな看板」に対する描写を行うという流れになっている。つまり(8)における「大きな看板」はそれまでの「一同」に関する叙述の中に新たに導入され、続く文で描写の主体となっている。(9)は“看到”が用いられた文である。

(9) “咚！咚！咚！”保良刚刚压抑住胸口的狂跳，就在圆窗斜射的晨曦中看到一个男人的剪影。这剪影有点象个幻觉，迫使保良再次发出声音，试图确认：“有人吗？”

(海岩：河流如血)

「どん！どん！どん！」保良はどうか胸の強い驚きを抑えると、円窓に射し込む朝日の中に一人の男のシルエットを見た。このシルエットは少し幻觉のようであり、保良にもう一度声を出して確認するように迫った。「誰かいますか？」]

(9)は建物内に入った「保良」という人物が、ある物音を聞いている場面である。その物音に対し、「保良」が驚き、「ある男性のシルエット」を目にする。そこで、(8)と同様に“看到”により不定の名詞句“一个男人的剪影 [一人の男のシルエット]”が導入され、続く文において「シルエット」が“这剪影有点象个幻觉 [少し幻觉のようである]”と描写されている。そして場面はその男性と「保良」とのやり取りへと移っていく。

次の“听见”“听到”では目的語となる名詞句は視覚的な事物ではないが、続く文でその目的語の発話内容、あるいは情報の内容が示されている。

(10) 过了一会儿，又是沉默。只听见一个刺耳的抱怨声：“哼，年头变了。没想到咱们还得跟个婊子一块儿念书。”马上又有另外一个声音接着说，“这到底是个什么学校，叫有身份的人跟个卖艺的坐一块儿？”这个女人约摸三十来岁，两眼恶狠狠，冷冰冰，不怀好意地看着秀莲。秀莲认识她，她是个军阀的姘头。另外那个姑娘，是个黑市商人的女儿。

(老舍：鼓书艺人)

[すぐに、嵐が吹き荒れたかのように、女の子たちはぺちやくちやとしゃべり出した。少しすると、また沈黙になった。ただ一つ耳ざわりな文句が聞こえた。「ふん、時代が変わったのね。私たちが売女と一緒に勉強しなくちゃならないなんて考えもしなかった。」すぐにまたもう一つの声が続いて言った。「これはいったい何の学校なの、身分のある人間を芸人と一緒に座らせるなんて？」この女性はだいたい三十ちょっとで、両眼は凶悪、冷酷で、意地悪気に秀蓮を見ていた。秀蓮は彼女を知っていた。彼女は軍閥の情婦である。もう一人のあの娘は、闇市商人の娘だった。]

(11) 他们听到一个消息：阴城的政府一定会抱着保境安民的苦心，不去招惹小日本。

(老舍：蜕)

[彼らはある情報を聞いた。陰城の政府は必ず国境を保ち国民を安心させるという心を抱いて、日本などを相手にしたりはしない。]

(10) はある教室内で、「彼女（秀蓮）」が他の人間の目を気にするという叙述から始まっている。ここでは“听见”によって“一个刺耳的抱怨声 [一つ耳障りな文句]”が新たに導入され、続く一文でその発話内容が示されている。またその発話の後にも、“一个声音 [一つの声]”と耳に入るものが続けて示され、その発話内容が続き、最終的には“军阀的姘头 [軍閥の情婦]” “黑市商人的女儿 [闇市商人の娘]” というその声を発した二人の人物が紹介されている。その際、前者には“这个 [この]”、後者には“那个 [その]”という指示詞が用いられている。つまり彼女らは“听见”によって導入された「(ある) 声」と照応関係にあり、(10) でも、初めにある事物を導入し、それに関する説明、描写が続くというかたちにとられていることが分かる。(11) は段落初めの一文であり、“一个消息 [一つの情報]”が“听到”で導入され、それ以降述べられることは、その情報の内容である。次の例は“发现”が用いられたものである。

(12) 新的线索出现了。

一、[……] 二、刘丽珠的电话号码本末页发现一个无名的电话号码。

“什么人的电话号码才会不注名呢？”老单问小曲。 (王朔：枉然不供)

[新しい手掛かりが現れた。一、[……] 二、劉麗珠の電話帳の最後のページに一つの無名の電話番号を発見した。

「どんな人間の電話番号だと記名されないんだ？」単さんは曲さんに聞いた。]

(12) では「新しい手掛かりを見つけた」という初めの一文から、二つの項目に分けて手掛かりが示されている。“一个无名的电话号码 [無名の電話番号]”はその手掛かりであり、新たな情報の導入であると言えるだろう。ただし(12)では、目的語である「無名の電話番号」に対して、続く文で描写を行っているわけではなく、また内容を詳しく述べているわけでもない。続く文で述べられているのは、その「無名の電話番号」に関する会話である。

(8) - (12) をまとめると、目的語が新たな事物として、物語の中に導入されるときに、無標形式が用いられており、さらに、続く文脈でその事物に関して話題が展開していると言うことができる。

この特徴は、“看见”や“看到”を述語とする無標形式が、単独で自立した文にならない場合にも見られる。次の例では文を切らずに、新たな事物の導入と、その事物に関する描写が行われている。

(13) 还有一次看见一个大女孩，黄毛，戴口罩，捂大红拉毛围巾，一身女式灰军装，骑一辆26红女车，十分飘，一路按着转铃，在路口拐弯，被几弹连续击中，一声没吭又骑了两圈一头栽进柏树丛。 (王朔：看上去很美)

[またあるときには、大人の女性を見かけた。黄色い毛で、マスクをし、毛の立った真っ赤なマフラーをして、全身を灰色の女性用の軍服に包み、26 紅女車にまたがり、かなり格好よかった。道中ベルを鳴らし、辻を曲がり、何発か被弾

したが、一言も漏らさずまた少しこいで頭からコノテガシワの林に倒れ込んだのだ。]

(13) は段落の初めの文である。まず、“还有一次 [さらにあるとき一度] ” と、ある出来事をこれから述べることを示され、これまでと同様に、“看见” で「ある一人の女性」を新たに導入している。次の (14) も同様である。

(14) 快到军事博物馆时我们看到一支仍然穿少先队服的小学，队旗上写着罗道庄小学。
(王朔：看上去很美)

[もうすぐ軍事博物館に着くという時に、私たちはあいもかわらず少年先鋒隊の服を着ている小学校の一团を見た。隊の旗には羅道庄小学と書かれている。]

これらの例は、形の面では (8) - (12) と異なり、文が終止しているわけではない。しかし、その内容を見ると、(8) - (12) と同様、対象となる事物を導入し、その対象に対する描写、及び内容の説明といった導入された事物に関する陳述が続いている。

以上の例は、全て名詞句を目的語にとった例であるが、“看见” “看到” “听见” “听到” “发现” は文を目的語にとることもできる。この場合、荒川 1981、郭锐 1997 にも指摘されているが“了” を用いることは少ない。次の (15) を見られたい。

(15) 董延平说，“这事我可知道，咱们医务室那点补药都让医务室那帮打自己屁股上了。有次我亲眼看见吴姗锁门坐在屋里给自个打青霉素。” (王朔：永失我爱)
[董延平は言った。「このことは知ってるんだ。我々の医務室のあの栄養剤はみんな医務室のやつらにやつらの尻に打たれてしまったんだ。あるとき、私は自分の目で、吴姗がドアを閉め、部屋の中で自分にペニシリンを打っているのを見た。」]

知覚の表現における無標形式の中で多くを占めるのは、この文を目的語にとる例である。これまでの例と異なり、文を目的語にとる場合には、目的語内の名詞句に制限はない。(15) では固有名詞である“吴姗 [吴姗] ” が用いられている。また、(15) は会話文であり、下線部で発話が終了している。(8) - (14) の名詞句を目的語に取った例では、ある事物を導入した後、その事物に関する話題が続いていたが、(15) を見ると、“咱们医务室那点补药都让医务室那帮打自己屁股上了 [我々の医務室のあの栄養剤はみんな医務室のやつらにやつらの尻に打たれてしまったんだ] ” という発話のあとに、その実例として、“有次 [あるとき一度] ” で導かれる体験が語られている。ここで“看见” によって、導入されているのは不定の事物ではなく、あるイベントそのものである。このような文を目的語にとった例は名詞句単独の目的語をとる例よりも、文としての自立性が上がり、表 (1) を見ると、116 例のうち、22 例が文を目的語にとって文終止している。次の (16) で導入されているのも一つの出来事である。(15) と異なるのは続く文脈でその出来事に関する描写が続く点である。

(16) 院子里人不多，住在这里的人白天都出门打工去了，但仍然有不少惊异的目光，从

两侧的门窗里投射出来，追随着刘川的背影一路往里[……]在院子的尽头，他们看到这个年轻人把一位徐娘半老的女人堵在一间小屋的门口，大声质问，声音激动，词句错乱，语意不详。 (海岩：深牢大狱)

[庭には人が多くない、ここに住んでいる人は昼間皆働きに出かけている。しかしなおも少なくない怪訝そうな眼が、両側の戸や窓から差し込んで来て、劉川の背中に沿って中に向かい、[……]庭のはずれまで追って来ている。彼らはこの若者が一人の年増の女性を一つの小部屋の入り口にふさぎ込んでいるのを見た。大声で詰問し、声は高まり、言葉は支離滅裂で、意味もはっきり分からない。]

以上、知覚の表現を主要動詞に持つ無標形式の完了事態表現を観察してきたが、ある事物や人物の導入、あるいは出来事の導入という文脈で使われる傾向があるということが分かる。ここで疑問となるのはこれらの特徴と“了”を伴う完了表現との間に違いがあるのかどうかということである。次節では“了”を用いる完了表現との比較を通して、無標形式の完了事態表現が持つ意味を考察する。

3.2 “了”を伴う有標形式との差異

“了”を用いる完了表現は無標形式に比べ、目的語に関する制約がそれほど強くなく、定名詞句が用いられる。表(1)を見ると文終止する10例のうち、4例が指示詞の付いた名詞句、4例が人称代名詞であり、あとの2例は、それぞれ修飾語の付いた普通名詞と固有名詞である。(17)は指示詞を伴う目的語をとる例、(18)は人称代名詞を目的語にとる例である。

(17) 似乎还有一个更久远的年代，那时他住在家里，房间很小，总是没人。窗户上飞舞着无数绿树枝。牛奶开了，雪白的泡沫从小锅的锅盖噗噗冒出，被火苗燎得焦黄。那孩子看见了这些。还有个中午，那孩子独自呆在一大片白菜地里，被阳光晒得昏昏欲睡，不知自己是谁，身在何处。 (王朔：看上去很美)

[まるでもう一つさらに長い時代があるかのように。その時彼は家に住んでいて、部屋は狭く、いつも人がいなかった。窓には無数の枝が舞っている。牛乳が沸騰し、真っ白い泡が鍋の蓋からあふれ出し、炎で黄色く焦げてしまった。その子にはこれらが見えていたのだ。またある日の昼、その子は一人で白菜畑にたたずみ、日の光を浴びて眠くなり、自分が誰であるのか、どこにいるのかわからなくなった。]

(18) “[……]因为我看见了你。可能你没有印象，可我的记忆是不会错。当时从昏迷中醒过来，走到病房窗前，准备再次寻死往楼下跳时，我看见了你。你正从大街上走过，穿着花裙子，像个花蝴蝶。[……]” (王朔：你不是一个俗人)

[「[……] なぜなら私はあなたを見たからです。おそらくあなたは印象にないと

思うけれど、私の記憶は間違いないはずです。あの時意識を取り戻して、病室の窓の前へ行って、もう一度死のうと飛び降りる準備をしていた時、私はあなたを見ました。あなたは通りを過ぎるところで、柄物のスカートをはいて、まるで鮮やかな蝶のようでした。[……]]

(17)を見ると、前半部である出来事が描かれ、それを下線部の“这些 [これら]”でまとめ、“那孩子 [その子ども]”が「見た」ということを表している。そして続く文は、その「これら」に関する描写ではなく、「その子ども」の次の行動へと移り変わっている。つまり(17)における目的語は新たに導入され、描写される対象ではなく、すでに話し手・聞き手にとって既知の事物である。

(18)の初めの“看见了”は理由を述べる文に用いられている。この“看见了你 [あなたを見た]”が“你 [あなた]”を導入する場面で用いられていないことは、続く文で“看见了”という動作行為自体がどのような時間、場所で行われたのかということの説明していることから明らかであろう。二番目の“看见了”では、後続する文が目的語である“你”の描写になっている。しかし、ここではまず「自分の記憶が間違っていない」ということを言い表しており、その後“看见了”が用いられている。つまり、二番目の“看见了”においても、“你”を新たに導入して、それを描写するというというより、「私があなたを見た」という動作行為自体を述べることに主眼がある。

これに対して、無標形式の完了事態表現は、「誰が何を見る」という動作行為そのものよりも、その「見る」という行為によって導入される事物の方に焦点があてられている。(19)を見られたい。

(19)“别搅别搅。”我制止丁小鲁，对杨重作倾听状，“嘛事？”“我和马青奔这儿来的时候，在礼士路口电线杆子上看见一帖子。”杨重道，“说有一杂志办不下去了，招人承包，爱登什么登什么一概不管只要赚钱。”（王朔：一点儿正经没有）[「邪魔するなよ。」私は丁小魯を止めて、楊重に聞く姿勢を見せて言った。「何事だ？」「私と馬青がここにやってくる時、礼士路の電柱で一枚の張り紙を見かけたんだ。」楊重は言った。「ある雑誌がやっていけなくなって請け負う人を募集している、載せたいものは何でも載せられ、金さえ稼げれば、何でも構わないと書いてあった。」]

(19)は“嘛事 [何事だ]”という疑問文にこたえる形で、用いられた“看见”である。まず“看见一帖子 [張り紙を見た]”と述べ、途中で“杨重道 [楊重が言った]”が挿入されて、その内容を語っているが、ここで、「何事だ」に対する答えは「張り紙を見た」ということではなく、張り紙の存在と、その内容である。

このアスペクト有標形式と無標形式の間の差を一言で表すならば、文の中でプロファイルされるものの違いであると言えるだろう。つまり(17)(18)のアスペクト有標形式では「誰が何をどうする」という動作行為自体がプロファイルされており、(19)の無標

形式では目的語である名詞句がプロファイルされている。(17)では「その子ども」が「(これらのことを)見た」、という行為自体がプロファイルされているのに対して、(19)の“在礼士路口电线杆子上看见一帖子[礼士路の電柱で一枚の張り紙を見かけた]”という文の中でプロファイルされているものは、“看见”という動作行為ではなく、むしろ“一帖子[一枚の張り紙]”の方である。

このようなプロファイルの差に目的語と共起する数量詞が関係していることは言うまでもない。上述のように中国語の数量詞は名詞の不定性と関係があるとされている。不定の事物を目的語にとるのならば、新情報が述語動詞の後ろに置かれるという中国語の情報構造から言っても、目的語がプロファイルされるのは当然のことであるように思える。しかし、数量詞が付加されたからといって、必ず目的語の事物がプロファイルされるというわけではない。無標形式に比べると少ないが、“了”を伴う完了事態表現でも数量詞が付いた名詞句が目的語として用いられることがある。

- (20) 当他发现泪水涌上了他眼眶，他蓦地冷静下来犹如在愤怒狂乱中听到了一声枪响。他继续看着这个娇小的婴儿，几乎是不带任何感情冲动地对自己发下了一个誓言：
(王朔：我是你爸爸)

[涙が眼の縁に湧いて来たのに気付いたとき、彼は突然冷静になり、まるで怒りに狂った最中に一発の銃声を聞いたようであった。彼はこの小柄な赤ん坊を見続けていた。何の感情も抱いていないかのように、衝動的に自らに対して一つの誓いを述べた。]

(20)では“一声枪响[一発の銃声]”という数量表現の付いた名詞句が目的語となっているが、続く文で示されるのは“一声枪响”に関する陳述ではなく、続けて行われる“他[彼]”の行為である。(20)における“听到了一声枪声[一発の銃声を聞いた]”は“他[彼]”が「冷静になった」ということを喩えて用いられている。つまり、ここでプロファイルされているのは「一発の銃声」のみではなく、“在愤怒狂乱中听到了一声枪响[怒りに狂った最中に一発の銃声を聞いた]”という行為そのものであると考えるべきである。

ただし、すべての例が(17)(18)(20)のように明確に無標形式と区別されるわけではない。次の(21)(22)に例に出てくる“看见一个人”と“看见了一个人”を見ると、どちらも共に、続く文脈で“一个人[一人の人]”の描写を行っており、表面上両者に差がないように見える。

- (21) 等旅客走完，月台上人稀了，朱老忠才带上一家大小走过栅口。进了候车室，看见一个人，在售票处窗口背身站着，胳膊窝里夹着一把铁瓦刀，手里提着个小铺盖卷，铺盖卷上裹着块麻包片。
(ccl⁵)

[旅行客が去ると、プラットフォームは人がまばらになった。朱老忠はようやく家族全員を連れ柵の入り口を通った。駅の待合室に入ると、一人の人が見えた。

切符売り場の窓口に背を向けて立ち、わきの下に鉄のこてをはさみ、手には布団を巻いた物を持ち、その布団を丸めたものには麻の包みが巻きつけてあった。]

(22) “咦，梁大牙呢？”杨庭辉问。东方闻音伸手一指：“看，在那儿。”[……]

杨庭辉扬掌一挥：“走，看看去。”

还没有走到门口，就看见一个人，缩头缩脑地弓着腰，急急忙忙地蹿出门外，怀里还抱着一个物件，样子十分鬼祟。[……] 杨庭辉断喝一声：“梁大牙！”

(ccl)

「あれ、梁大牙は？」楊庭輝は聞いた。[……]

楊庭輝は手を一振りした。「行こう、見に行こう。」

門に着かないうちに、一人の人を見かけた、おずおずと腰を曲げ、忙しく外に飛び出し、懐にはあるものを抱え、ずいぶんとこそこそしている。[……] 楊庭輝は一声怒鳴りつけた。「梁大牙！」]

(21) (22) は (4) で挙げている郭锐 1997 の例と同じ“一个人 [一人の人]”が“看见”の目的語となった例である。この両者に差が感じられないのは、数量表現が付けられた不定の名詞句の場合、「(不定の) ある事物をどうする」という動作行為を述べること、つまり、動作行為がプロファイルされる文と、ある「(不定の) ある事物」をプロファイルすることの意味が接近するためであろう。

この二例における違いを見出すとすれば、それは (22) ではその直前に「見に行こう」という台詞があり、そのあとで「見かける」という点である。そして「見かける」人物は (21) では想定外の人物であるのに対して、(22) ではすでに想定されている「梁大牙」である。このような違いもまた、“了”の有無に関係していると思われる。つまり、話者にとって「見る」という行為は前提として提示されている。ここでは“看见”という行為そのものに焦点があるとも考えられ、それによって“了”が共起していると分析することが可能である。

以上の考察において、アスペクト有標形式と無標形式の間の相違は、文内のどの要素がプロファイルされているかを反映するものであることを指摘した。それは、前景化する要素の違いであり、換言すれば、背景化する要素の違いであるとも言える。無標形式におけるそれは、主要動詞の動作行為そのものであると考えられる。つまり、無標形式における“了”の脱落は述語が表す動作行為が背景化した結果を表すものであると考えられる。

これは副詞との共起関係からも見て取ることができる。荒川 1981 などにも指摘されていることであるが、副詞“终于”を伴う場合には、“了”が必要となる。

(23) “我终于看见一座山。[私はついに一つの山が見えた。]

“终于 [ついに]”は“表示经过较长过程最后出现某种结果。较多用于希望达到的结果

[長い過程を経て最後にある結果が出たことを表す。達成しなかった結果に用いられることが多い。]” (呂叔湘 1999: 687) という意味を表す。つまり“终于”の修飾している動作行為は希望し、成し遂げるものである。そのため動作主の強い意志性を含意し、行為そのものの成否に焦点が当たっている。この場合“了”を落として背景化することはできないのだと考えられる。

また、こうした他動性による、“了”との共起の違いは述語動詞の違いにも表れる。文を目的語に取る場合は“了”を用いることが少ないと言われる。例えば前掲の例 (15) に“了”を加えた (24) は不自然である。

(24) ?有次我亲眼看见了吴姗锁门坐在屋里给自个打青霉素。 (王朔: 永失我爱)

[あるとき私は自分の目で吳姍がドアを閉め、部屋の中で自分にペニシリンを打っているのを見かけた。]

しかし、(24) の述語動詞を他動性の高い“看到”に変えると、文の許容度は上がる。また小説中にも以下のような例が見られる。

(25) 他 (=马老板: 引用者注) 是一个人走过来的, 一边走一边打着手机, 完全没有注意到前方突然冒出的几个憧憧人影, 正以合围之势向他逼近。最先迎上去的是刘存亮, 字正腔圆地叫了一声: “马老板!” 可能是因为太紧张了, 这三个字叫得象是背书。马老板站住了, 看到了面前的拦路者是三个男人, 前边两个是便衣, 后面的一个是警察。 (海岩: 河流如血)

[彼 (=馬さん: 引用者注) は一人で歩いて来た。歩きながら携帯を操作しており、前方から湧き出てきた何人かの揺れ動く人影が、まさに包囲の体制でもって彼に接近していることに全く気付いていなかった。

もっとも先に向かったのは劉存亮であり、彼ははっきりと一声叫んだ。「馬さん!」おそらく緊張しすぎたのであろう。その三文字は暗唱しているかのようであった。

馬さんは立ち止まり、目の前の道を遮る物が三人の男性であるのを見た。前の二人は私服で、後ろの一人は警官である。]

(25) は主人公である少年が、他の仲間二人を引き連れて、“马老板 [馬さん]”を待ち伏せし、捕まえる場面である。まず、彼らに近付いて来る「馬さん」が描写され、それに対し仲間の一人である「劉存亮」が、“马老板!”と叫んでいる。“看到”は、そのあとの彼の動きを表している。他者の動きを叙述するのであるから、“看见”という他動性が低く、言わば受動的に知覚する行為を表す動詞句では叙述することが難しく、ある程度の意志性をもつ“看到”という形が選ばれる。またここで問題となるのは、「馬さん」の行為そのものである。したがって、文を目的語にとっても、述語には“了”が用いられ、その動作行為自体を前景化しているのだと考えられる。

本章ではアスペクト有標形式と無標形式を比較することで、無標形式においては、動

作行為が背景化し、目的語である名詞句や文が前景化しているという分析を行った。

木村 2012 は“了”を「実存化」の標識とする。「実存化」とは、「話し手が視点を置く時間領域もしくは空間領域に事柄や事物を定位し、それらの具体化・個別化を図る」、一種のグラウンディングの方法である。その中で動詞接尾辞の“了”は時間的な「実存化」を担っている。つまり、あるコトに時間的な現実性を付与するためには“了”を用いる必要があるということである。しかしながら、本稿で議論している無標形式は現実性を帯びた、つまり「実存化」している事態を表していながら、“了”によってマークされていない。このような表現はどのように現実世界に定位されているのだろうか。

また、「他看见小王 [王くんが見えた]」が言い切りの形として不自然であるという事実に関しては、本章で行なった動作行為が背景化しているという考察だけでは説明することができない。本節では、無標形式の特徴の一つとして、プロフィールされる事物が導入され、描写されるものであるという点を挙げた。このような、ある事物、出来事の導入と深く関わる構文として、中国語には「存現文」と呼ばれる構文カテゴリーが存在する。次章ではその中国語の存在表現に関して、これまでの研究成果からその特徴を述べ、それがどのように無標形式の完了事態表現と関係しているのかを考察する。

4. 中国語の存在表現

ある事物の「存在」「出現」「消失」を表す際、中国語では「存現文」という特別な構文が用いられる。動作行為を表す無標の語順は通常、「動作主+動詞+動作対象」であるが、「存現文」では「場所句/時間句+動詞+(「存在」「出現」「消失」する)事物」という語順がとられる。

この内、動詞“有 [ある]”を用いる表現は“有”構文と呼ばれる「存在」を表す代表的な構文である。木村 2012 ではその“有”構文をさらに大きく二つに分けている。目的語が常に不定表現でなければならない「時空間存在文」と、そのような制約のない「知識」の表現に属する存在文である。(26) は前者の例であり、(27) は後者の例である。

(26) 花盆旁边儿有一块石头。[植木鉢のそばに石が一つあります。]

(27) 京剧的旦有花旦、老旦、武旦。

[京劇の女形には「花旦」「老旦」「武旦」があります。] (木村 2012: 298,310)
前者の「時空間存在文」の意味機能は以下のように記述される。

(28) 目的語が常に不定表現でなければならないというその構文的特徴を踏まえて、時空間存在文の意味機能を捉え直すならば、それは「実-時空間におけるリアルな〈非既知〉的事物の実体的存在を言い立てる文」であると特徴づけることができる。話し手(または聞き手)の脳裏には特定の事物——人、物、事——が既知の対象として数多く存在する。すなわち、既知的事物が知識として登録されている。そのあらゆる既知の事物のいずれとも一致同定 (identification) が成り立

たず、したがって、話し手（または聞き手）にとっては「どこの誰」とも「どこのなに」とも「誰のなに」とも同定できない非既知の「誰か」あるいは非既知の「なにか」——すなわち未知なる対象——が、とにもかくにも実体として「存在する」ということを述べ立てる文、それこそが時空間存在文である。

（木村 2012: 319）

こうした特定の時空間におけるリアルな具体物の存在を表す場合、(30) のような固有名詞や (31) のような裸の一般名詞は用いられない。

(29) 铁笼里有一只熊猫。[おりのなかにパンダが1頭います。]

(30) *铁笼里有陵陵。[おりのなかにリンリンがいます。]

(31) ?铁笼里有熊猫。[おりのなかにパンダがいます。] （木村 2012: 300,301）

つまり「時空間存在文」とは談話の中に非既知の事物を導入する構文であると考えられる。このような機能を持つ特殊な構文としてもう一つ「不定名詞主語文」を挙げることができる。「不定名詞主語文」とはその名の通り不定の名詞を主語に立てる構文である。中国語では、不定の名詞は普通、主語には立つことができない。

(32) *一个客人来了。[一人のお客が来た。]

しかし、ある環境下では「不定名詞主語文」が成立する。張伯江 2009 は小説等の資料から、その「不定名詞主語文」に「時間的な定位」が必要であることを発見し、Chafe 1979 の episode の概念を用いて、以下のように結論付けている。

(33) 无定名词主语句的作用就是在叙述性篇章中起到转移情节的作用，引出一个新的参与者和一个新的事件。 （張伯江 2009: 242）

[不定名詞主語文の機能とは、叙述性の談話の中で episode を転換する機能であり、ある新しい参与者と新しい事件を導入することである]

Chafe 1979 の提唱する episode とは、書き言葉で言えば「段落」によって区切られるまとまりのある談話単位である。一つの episode が終わり、新しい episode が始まる境界は、明示的なかたちでは書き言葉では「段落」の切れ目であり、話し言葉では「言いよどみ」であるが、他にも様々な標識が考えられる。張伯江 2009 ではその境界を跨ぐ、つまり episode 転換の機能が「不定名詞主語文」にあるとする。つまり不定の人物が動作主である新規の出来事が導入されることによって、episode が転換しているとするのである。

「時空間存在文」がある時空間に非既知の事物を導入するのに対して、「不定名詞主語文」は、不定の人物による新規の出来事を導入している。これまでの観察から、無標形式の完了表現もまた新たな事物、あるいは出来事を導入する際に用いられる傾向を有しているということが言える。実際、これら「時空間存在文」「不定名詞主語文」は無標形式の完了事態表現と共起することがある。

(34) 我这样想着，忽然看见树林里有一个孩子。那是一个婴儿，只有在二十一层上才可以看到他。 （史铁生：第一人称）

[私がこのように考えていると、突然林の中に一人の子供がいるのが見えた。それは一人の赤ん坊で、二十一階以上でようやく見る事ができた。]

(35) “然后我又走进一座大厅，这时候，我忽然看见一个人向我走来，一个女人。那我可就如实说啦？” (史铁生：礼拜日)

[[それから私はまた大広間に入った。この時、突然一人の人が私に向かって歩いてくるのが見えた。女性だ。これならありのまま言ったことになるかい？]

(34) では“树林里有一个孩子 [林の中に一人の子供がいる]”という「時空間存在文」が標識形式の目的語として用いられ、(35) では“一个人向我走来 [一人の人が私に向かって歩いてきた]”という「不定名詞主語文」が用いられている。

このような構文的な特徴から考えると、(4a) の“他看见一个人”における“一个人”もまた単純な目的語とは考えられない。知覚の表現で導入される不定の名詞句は存在表現により導入される名詞句に非常に近い。つまり“他看见”という動作行為が背景化してしまっているとき、文全体の意味は「“一个人”が存在している」という意味に近づいていると考えることができる。

(36) 他看见一个人 ← 有一个人

つまり、「彼」の「見える」という知覚を通して、その現場にいる「ある人」の存在を述べていると考えられる。

そう考えると (5) “[?]他看见小王。”のように、目的語に固有名詞を用いることができないという現象も説明ができる。すでに話し手と聞き手に存在が確認されている“小王”を、“他看见小王。”という形で新規に導入するため、不自然な表現になってしまうのである。「王くんを見かけた」という出来事を述べるためには、(37) のように“看见”に“了”をつけて「私が見る」という行為を前景化する必要があるのである。

(37) 他看见了小王。[彼は王くんを見た。]

以上、無標形式には存在表現としての一面があることを述べた。では、この構文は存在表現の中でどのように位置づけられるのであろうか。上に挙げたように、この構文は、「存現文」「不定名詞主語文」自体を目的語としてとることができる。また張伯江 2009 が「存現文」と「不定名詞主語文」との間に位置付けている“有”を用いた兼語文もまた目的語としてとることができる。

(38) “您有蜡嘴雀吗？”“没有。你有？”“我也没有。我看见有一个人有，蜡嘴雀飞起来，那个人就把三个骨头球儿扔上天去，[……]” (史铁生：礼拜日)

[[あなたはマメドリを持っていますか？]「ない。あなたは持っていますか？]

「私も持っていない。ある人が持っているのを見ました。マメドリが飛び立ち、その人が三つの骨の球を空に投げると、[……]]

張伯江 2009 によるとこれら三種の存在表現は「時空間の定位の仕方」「episode の転換機能」「導入された事物の後啓性」などの点において異なるという。無標形式はそれらを

またがり三種の構文全てを目的語としてとることができる。そのように考えると無標形式の完了事態表現はそれ自体がある種の個別な存在様式に関わっているとは考えにくい。むしろ、それら存在表現の外側に位置していると考えられる。つまり存在表現がある時空間に事物の存在を定位するのに対して、無標形式は、そのある時空間における事物の存在を、ある領域に位置付けている。例えば“我看见一个人”という形式がとられたならば、それは「私の視界」という領域の中における時空間で「一人の人」の存在を述べているのである。そして、ある領域においてある事物の存在を述べ立てる以上は、その領域の設定自体はすでに「完了」した事態であると解釈される。

刘月华等 2001 には“住慣 [住む-慣れる]・闹翻 [騒ぐ-翻す (仲たがいます)]・吃膩 [食べる-飽きる]・看错 [見る-間違える]・消掉 [消す-なくす]・看够 [見る- (頻度が高くて) 嫌になる]・听烦 [聞く-煩わしい]”などの述語形式を持つ場合は、完了表現として“了”が必要になるということが述べられている。

(39) 他们这几年吃膩了鸡鸭鱼肉, 想吃青菜豆腐。 (刘月华等 2001: 575)

[彼らはここ何年か肉類を食べ飽きてしまって、青菜豆腐を食べたがっている。]

ここでこれらの動詞結果補語構造が“了”を伴わない場合に不自然になるのは、この動詞結果補語における領域、つまりここでは“吃膩「食べ飽きる」”という行為を通して、ある事物(ここでは「肉類」)の存在が認識されるという解釈が難しいためであろう。

“看见”の場合には、「見る」という行為を通じてある事物の存在が認識されるが、(39)の場合、「食べ飽きる」という結果を経てある事物の存在が認識されるのではなく、すでに認識している“鸡鸭鱼肉”に対して、「食べ飽きる」という評価付けがなされているのである。三節の最後に“了”の持つ「実存化」(木村 2012)という概念を引用したが、本節の議論により、無標形式において、「実存化」の標識である“了”が用いられないということも一定の説明がつく。無標形式は、あるコトを時間的に定位しているというよりも、あるモノを時空間的に定位している表現である。そのため述語動詞は時間的な実存性を付与する“了”によってマークされる必要性がないと言えよう⁶。

5. おわりに

本稿では、「完了」のアスペクト辞である“了”を用いずに、完了表現を成立させる無標形式の完了事態表現に関して考察した。小説における実例を分析することで、これらの表現がある新規の完了した動作行為を表すというよりも、ある事物の導入に用いられるということが分かった。また、事物の導入に用いられる中国語の存在表現との関係から、無標形式の完了事態表現の成立条件の一つである目的語への数量表現の付加を説明し、この表現が存在表現に至る経緯としての行為を表すと結論付けた。存在表現は 1) “有”を用いて存在をそのまま表す場合、2) 一般動詞を用いて“家里种了一棵树。[家に一本の木が植えてある。]”のようにその存在の在り方を描写的に表す場合、また 3)

「不定名詞主語文」のように、ある事物が関与した出来事を表す場合と、様々に表し分けられる。本稿で考察した形式はそれとは異なる次元において、その存在物の存在の在り方の知覚というかたちで描写を行なっている。本稿は、知覚の表現に対象を絞って考察を行なったが、こうした分析により、無標形式を“了”と関連する単純なアスペクトの問題だけではなく、「存在表現」と関連する構文カテゴリーの問題として捉え直すことが可能となるだろう。

註

- 1 “了”には文末助詞も存在するが、本稿では特に断りのない限り動詞接尾辞の“了”を指す。
- 2 結果補語とは動詞の後ろに付く動詞・形容詞で、その動作・作用の結果を表すものである。
- 3 中国語において文が独立したものであるか判断することは難しいが、本稿では“。”“：”で終わる形式を文終止した形として扱う。また連動文に用いられるものは考察の範囲外とする。
- 4 本稿で用いた資料は老舍、曹禺、史铁生、王朔、海岩の小説である。
- 5 北京大学中国语言学研究中心现代汉语语料库（現代中国語コーパス）による用例。
- 6 知覚動詞がアスペクト辞を失った形式として“只见”等があり、張佩茹 2014 では、“只见”と“看见”に代表される他の動詞との機能的な違いに関して言及されている。本稿の無表形式が両者の間でどう位置づけられるかなど興味深い点が多いが、紙幅の都合上、ここでは論じない。

参考文献

- 荒川清秀 1981. 「“了”のいる時といらぬ時」, 『中国語学』 228 : 70-79.
- 原由起子 1994. 「“V了O動量”と“V了O”」, 『中国語学』 214 : 89-99.
- 木村英樹 2012. 『中国語文法の意味とかたち―「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究一』。東京：白帝社。
- 張佩茹 2014. 「現代中国語における視覚動詞の文法化」。東京大学大学院博士論文。
- 郭锐 1997. 「过程和非过程——汉语谓词性成分的两种外在时间类型」, 『中国语文』 3: 162-175.
- 李兴亚 1989. 「试说动态助词“了”的自由隐现」, 『中国语文』 5: 334-340.
- 刘月华等 2001. 『实用现代汉语语法（增订本）』。北京：商务印书馆。
- 吕叔湘 1999. 『现代汉语八百词（增订版）』。北京：商务印书馆。
- 吴福祥 2005. 「汉语体标记“了”、“着”为什么不能强制性使用」, 『当代语言学』 3: 237-250.
- 张伯江 2009. 『从施受关系到句式语义』。北京：商务印书馆。
- 朱德熙 1982. 『语法讲义』。北京：商务印书馆。
- Chafe, Wallace. 1979. The Flow of Thought and the Flow of Language. In T. Givon (ed.), *Discourse and Syntax*: 159-181. New York: Academic Press.
- Paul J. Hopper and Sandra A. Thompson. 1980. Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56-2: 251-299.

